こんなに近くで

彩宮菜夏

序章

まずはこの島のことを話さなければならない。

私が生まれ育った神凪島（かんなぎじま）は、本土から船に乗って五十分ほどかかる、寂れた島だ。そのほとんどが自然のままの山と森に溢れていて、そしてその隅には、白茶けた小さな町がある。住んでいるのは五百人ばかりの人と、四十匹ほどのねこだ。

船が着くのは漁港というほどでもない、申し訳ばかりの港である。そもそもこの島の周りは、海流の関係で漁には向いていない。夏には濃い霧も出る。だから昔から、島の人々は浜の隅で、小さく自分たちの分だけを獲って済ませていたという。

私は船から降りる。客は私独りだった。

強い夏の日差しが、空から地から目に刺さる。

港を出るとすぐのところに、小さな商店街がある。私はそこに、足を踏み入れた。

まばらに店が並んでいるが、外から見ても人影はない。死んだような商店街だった。あるいは、忘れられたような。酒屋が一軒少々立派なものがあるけれど、そこも今は、静まりかえっていた。私は、そんな処を歩いた。

途中に、コンクリート製の小さな時計台が立っていた。

時計は、十二時を少し過ぎたところで止まっていた。

そんな商店街を抜けると、そこには町がある。

私の育った町だ。

狭い土地に隙間なく屋根と屋根とが突き合わされ、道は延々と日陰が続く。私はそこを、静かに歩いた。潮の香りがした。夏だというのに、どこか涼しかった。

どこまで行っても、昔と何も変わらない町だった。

幾人かの町の人々とすれ違う。けれど向こうは、私に気付かなかった。

私が変わってしまったか向こうが忘れてしまったか、きっとどちらかだろう。

そのまままっすぐ道を行くと、細く綺麗な川に突き当たる。小さい頃、よくここで遊んだことを思いだした。水は澄み切ったまま石の川床を透かして流れ、日の光を眩いほどに照り返す。私は橋の上から、その様をじっと眺めた。

橋の袂には、荒く削った小さな石像が一つ、ぽつりと置いてあった。何を象っているか、風化してもう分からなかった。

川を渡ってすぐに右へ折れると、また長く懐かしい家並みがしばらく続く。そうしてやがて、道の突き当たり、町の外れへと辿り着いた。そこから唐突に、深く生い茂る森が始まっていて、木々の合間に、物言いたげな石段が続いていた。私はそれに、足を掛けた。

石段の周りには、橋の傍らにあったものと同じ形の石像が、いくつもいくつも際限なく並んでいる。ここにあるものはまだあまり古びておらず、刻まれた柔和な顔を見て取ることが出来た。

しかしその表情はどことなく、島の外で見る地蔵のそれとは違っていた。柔らかではあるものの慈悲を思わせることはなく、むしろ底知れないようにすら感じられた。私の知る感情の発露ではなく、そういう意味でその表情は、無表情と同じとも言える。そして苔むしたそれら石像の奥には、歪み絡み合った木の幹と葉の緑が暗がりへと融けるようにずっと続いていた。そんな暗がりの下、私は石段を、何も言わずに上った。

石段は全部で二百二十一段ある。

上りきったそこには大きな石の鳥居が立っており、その向こうの境内には、ひどく立派な本社がある。私はそこをそのまま通りすぎ、本社の裏へと回る。

裏には自然のままに森が広がる。けれどじっと目を凝らすと、そこには路がある。

私はそこへ入っていく。

枝が跳ねて頬に当たり、靴は泥に汚れ、葉が服にまとわりつく。それでも厭わず、私は木々と草むらを掻き分けながら進んだ。降り来たる光は、薄く柔らかい緑色に染まっていた。

そうして、視界が開ける。

苔と蔦で覆われたその場所には、高く真っ直ぐに伸びる幾本もの巨木と、石で出来たベンチがあった。

小さい頃ここへ来ると、私はいつも、木々の太い幹に抱きついていた。今日も、手で触れてみる。ざらついた幹の匂いが優しい。見上げれば、葉の合間からさらさらさらと陽が射し込んでいた。

そして、思い出す。

大切なともだちと三人で、私はいつも、ここへ遊びに来た。数えるほどしかこどもがいないこの島ではみんなが友達のようなものだったが、それでもあの二人は、特別だった。

彼ら男の子二人に、女の私が一人だけだったけれど、それを敢えて意識することなど一度もなかった。毎日他愛のないことをして、ただそれだけで、満たされていた。満たされていると意識することすらなかったのだ。それが日常だった。

私達の他に誰も知らないこの場所で、駆け廻り、追いかけあい、葉をもぎり、虫を見つけ、棒を振り回し、石を投げ、地面に寝そべったりもした。何がそんなに楽しかったのだろう。今こそ知りたいのに、私はもう、思い出せない。

遊び疲れればベンチに座った。いつ誰が造ったのか想像も出来ないほど古い、硬く冷たい、石のベンチだ。のどが渇けば、近くに川があった。もう少し奥へ行けば大きな滝があって、その傍らには浅い洞窟があり、その中には小さな社があることも、私達は知っていた。

そして、おとなたちは知らなかった。

今再び、私はベンチに腰掛ける。風の音しか聞こえない。私はふと、おとなの声がなかったから楽しかったのではないかと思った。町で遊べばどこかに目がある。いつ何を言われるか分からない。ここにはそんな軛（くびき）がない。誰にも知られず静かで、自由だった。

そう、おとなたちは何も知らなかった。昔からずっとそうだった。こんな、地の利も悪く漁も畑も田もまともに出来ず特産も名産も何もない島に何故自分たちが住んでいるのか、誰も知らなかった。知ろうともしなかったのだ。

だから、神罰が下る。
私は目を瞑り、小さい頃の思い出に静かにひたった。